

【p70～p75】 いつか必ず役に立つ 一大上宇市—

1 資料活用にあたって

- 長文のため、事前に読ませておく。
- 70ページ～72ページ9行目までは、宇市が信念をもって研究に没頭している様子について教師が要点を説明し、72ページ10行目から発問構成する進め方もある。
- 努力に焦点をあてれば内容項目はA(5)であるが、本資料は大上宇市が抱いていた大きな夢に焦点をあてて内容項目はC(16)で扱う。
- 先人の場合、努力を続けることは誰しもあることで、その努力のみ書いてある資料は、内容項目はA(5)で扱い、努力を続けることになった大きな夢が描かれている場合は、その夢で内容項目を定めるとよい。

2 資料の読み方のポイント

- 主人公の変化を問う資料ではなく、主人公(宇市)の生き方を貫くものを考える資料であり、宇市の立場で場面を捉えていく。(子どもが「宇市」になって考えられるように発問を工夫する。)
- 宇市の生き方を貫いたものは、「自分の研究を村の役に立てたい」という郷土愛の心であった。
- 主人公は変化しないが、宇市の立場で場面を捉えていく。(子どもが「宇市」になって考えられるように発問を工夫する。)

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 『新宮町合併45周年記念出版 まんが 大上宇市』
新宮町教育委員会 大阪書籍株式会社 1996年
- ・ 『郷土の偉大な博物学者 大上宇市』
新宮町教育委員会 株式会社共和印刷 1992年
- 大上宇市について
 - ・ 「コヤスノキ」の発見者として知られている。
 - ・ 1865年、現在のたつの市新宮町の貧しい農家に生まれる。体が弱かったため、薬草を求めて山野を散策したことが動植物学へ進む発端となった。
 - ・ 薬草を求めて歩いている内に、植物、動物、貝類と興味はどんどん広がっていき、中国、近畿地方は歩いていないところは無いと言われるほど採集と観察を続けた。「自分の研究は必ず役に立つ」という強い信念で、採集や観察したことは全て図説で丁寧に書き残した。
 - ・ 宇市の研究成果は、学歴を重視する学会では「いなか者の考え」として認めてもらえなかった。しかし、1900年(明治33年)、宇市が33歳の時に牧野富太郎によって「コヤスノキ」が世界の植物学会に発表されたことによって、宇市の名が脚光を浴びようになると、今まで発表された数々の報告が再評価・再確認され、植物、昆虫の業績だけでなく、貝類学会でも認められるようになった。
 - ・ 30年あまりも続けた村の気象観測や土壌研究の結果を生かし、米ではなく桑を植えて養蚕をすることをすすめ、村は、揖保郡一の繭の生産地となり生活を潤した。
- 「コヤスノキ」について
 - ・ 「コヤスノキ」は、西播磨と岡山県東部にしか生えていない珍しい植物である。
「幻の木」といわれていたこの植物は、大上宇市によって発見され、1900年(明治33年)、牧野富太郎によって世界の植物学会に発表された。
 - ・ 1927年(昭和2年)龍野市天王山のコヤスノキを兵庫県天然記念物に指定するための調査があったが、薪として刈り取られ若木しか残っていなかったため、相生市矢野町のコヤスノキが兵庫県の天然記念物に指定された。

4 展開の具体例

いつか必ず役に立つ 一大上宇市

- ・ **主題名** ・ふるさとのために C (16)
- ・ **資料の概要** ・宇市は、「自分の研究は必ず役に立つ」という信念を持って独学で研究を進める。学会でも認められるようになった自身の研究を生かし村のために懸命に働くが、日照りのために村の生活は楽にならない。あきらめかけた宇市であったが、「自分の研究は必ず役に立つ」という信念に奮起して、村の自然を生かした養蚕の導入を指導し、やがて村は活気づく。
- ・ **ねらい** ・「自分の研究はいつか必ず役に立つ」という信念から、村の土地にあつくわを育てかいこを育てる産業を生み出した宇一を通して、郷土を大切にす道徳的心情を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P73の写真(宇市が書き記したノートの一部)の写真をみましょう。	p72の9行目までで、「自分の研究はいつか必ず役に立つ」という信念を支えとして、主人公が研究に没頭していることをつかませる。
展開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。		学者として有名になることよりも村の役に立つことを願う、主人公の郷土を愛する心情をおさえる。
	・コヤノスギの発見で研究が認められた時の主人公の気持ちを考える。	研究が多くの人たちの間で認められるようになった時、宇市はどんなことを思ったのでしょうか。 ・自分の研究を村のために役立てたい。 ・村のためにこれからも研究を続けていこう。	村の現実を目の当たりにして無力感を感じている主人公の心を考えさせる。
	・村の生活が一向に楽にならない時の主人公の気持ちを考える。	夏の日照りが続き、村の生活がいつこうに楽にならない時、宇市はどんな気持ちだったのでしょうか。 ・どうすればいいんだ。 ・私にはこの村を助けることなどできない。	思い起こした「自分を支えた信念」がきっかけとなり、郷土のために力を尽くす気持ちが主人公に再び高まったことをおさえる。
	・若い頃の気持ちを思い出した宇市の気持ちを考える。	「いつか必ず役に立つ」という気持ちを思い出した宇市は、どんな事を考えたのでしょうか。 ・村の役に立つためにもう一度頑張ってみよう。 ・自分の研究は、必ずみんなの役に立つことを信じよう。	自分の研究が村の役に立ち、安堵している主人公の郷土を愛する心情をおさえる。
	・活気づく村に目を細めた宇市の気持ちを考える。	活気づく村に目を細めていた宇市は、どんなことを考えていたのでしょうか。 ・自分の研究が役に立ち、村が活気づいてよかった。 ・家族も村の役に立つ私の研究を理解してくれるだろう。 ・これからもこの村を大切にしていこう。	
終末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。	